國學院大學学術情報リポジトリ

『楚辭補注』譯注稿(二十九)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/2000260

『楚辭補注』譯注稿（二十九）

楚辭卷第三
天問章句第三

〔本文〕

(111) 羿焉彈日　　羿は焉くんぞ日を彈て、
(112) 烏焉解羽　　烏は焉くんぞ羽を解きたる。
(113) 禹之力獻功　　禹の力めて功を獻じ、
(114) 降省下土四方　　降りて下土の四方を省み、
(115) 焉得彼盍山女　　焉くんぞ彼の盍山の女を得て、
(116) 而通之于台桑　　之に台桑に通ずる。
(117) 閔妃匹合　　妃匹を閔へて合するは、
(118) 厥身是繼　　厥の身を是れ繼がしめんとすれども、
(119) 胡維嗜不同味　　胡維れぞ嗜むこと味ひを同じくせずして、
(120) 而快鼂飽　　鼂飽を快とする。
(121) 啓代益作后　　啓 益に代はりて后と作らんとして、

(122) 卒然離璧　卒然として璧に離れり。
(123) 何啓惟憂　何ぞ啓は惟憂し、
(124) 而能拘是達　而して能く拘を是れ達する。
(125) 皆歸躭籌　皆躭籌に歸するも、
(126) 而無害厥躬　而して厥の躬を害する無し。
(127) 何后益作革　何ぞ后益 革を作し、
(128) 而禹播降　而して禹は播降する。
(129) 啓棘賓商　啓 棘やかに商に賓し、
(130) 九辯九歌　九辯と九歌とあり。
(131) 何勤子屠母　何ぞ勤子母を屠り、
(132) 而死分竟地　而して死分して地を竟はれる。

〔通釋〕

羿はどうして太陽を射て、烏はなぜ羽を落としたのか。禹が精出して功績をたてまつり、朝廷から降って天下四方を視察している時に、どうして盒山の女を得て、台桑でこれと通じたのか。禹が配偶者のいないのを憂えて結婚したのは、自分の後継者を得んがためと思われるが、何故に衆人と欲望を異にしながら、ただ一朝の欲望を満足させたのであろうか。啓は益に代わって君となろうとして、にわかに災難に遭った。啓はどうして苦慮して、よくその拘禁から逃れられたのであろうか。啓の一派のものは皆益にその罪を訊問されることになり、啓だけはその身を害されなかった。どうして天子である益は革命を起こし、禹の血すじが後に伝えられたのであろうか。啓は速やかに商（の音）に賓して、九弁と九歌の歌を賜った。どうして勤勉な子である啓が母体を突き破って生まれ、母の身が裂けちぎれて死に、命を終えたのであろうか。

〔洪興祖補注〕

（111）（112）〈羿焉彈日　烏焉解羽〉

淮南言、堯時十日並出、草木焦枯。堯、命羿仰射十日、中其九日。日中九烏皆死、墮其羽翼。故留其一日也。彈、一作彈、一作斃。

〔補曰〕山海經、黒齒之北曰湯谷。居水中、有扶木。九日居下枝、一日居上枝。皆戴烏。注云、羿射十日、中其九。離騷所謂羿焉射日、烏焉解羽。傳曰、天有十日、日之數、十也。此言九日居下枝、一日居上枝者。大荒經曰、一日方至、一日方出。明天地雖有十日、自使以次迭出運照。而今俱見、爲天下妖、故羿禀天命、洞其靈誠、仰天控弦、而九日潛退也。歸藏易云、羿彈十日。說文云、彈、射也。音畢。引羿焉彈日。芎與羿同。然則彈或作彈、蓋字之誤耳。淮南又云、羿除天下之害、死而爲宗布。注云、羿、古之諸侯。此堯時羿、非有窮后羿。又云、日中有踆烏。踆、猶蹲也。春秋元命苞云、陽成於三。故日中有三足烏者、陽精也。天對云、大澤千里、羣烏是解。注云、烏當爲鳥。後人不知、因配上句、改爲烏也。山海經云、大澤・方・千里、羣鳥之所生及所解。又、穆天子傳曰、比至曠原之野、飛鳥之所解其羽。然以文意考之、烏當如字。宗元改從鳥、雖有所據、近乎鑿矣。

〔訓讀文〕

『淮南（子）』に言ふ、堯の時、十日並び出で、草木焦枯す。堯、羿に命じて仰ぎて十日を射しめ、其の九の日に中つ。日中の九烏皆死して、其の羽翼を墮す。故に其の一日を留むるなり。彈、一に彈に作り、一に斃に作る。

〔補に曰く〕『山海經』（「海外東經」）に、「黒齒の北を湯谷と曰ふ。水中に居り、扶木有り。九日下枝に居り、一日上枝に居る。皆烏を戴く」と。（郭璞）注に云ふ、「羿、十日を射て、其の九に中つ。「離騷」に所謂る『羿焉くに日を射て、烏は焉くに羽を解きたる』」と。（郭璞）傳に曰く、「天に十日有り、日の數、十なり。此れ言ふこころは、九日下枝に居り、一日

上枝に居る者なり」と。（『山海經』）「大荒經」に曰く、「一日方に至り、一日方に出づ。明らかに天地に十日有りと雖ども、自ら次を以て迭ひに出でて運照せしむ。而るに今俱に見はるるは、天下の妖たり、故に羿の天命を禀けて、其の靈誠を洞し、天を仰いで控弦し、而して九日を瀦退せしむるなり。『歸藏易』（佚書）に云ふ、「羿十日を彈る」と。『說文』（「弓部」）に云ふ、「彈は、射るなり。音は畢」と。「羿焉彈日」を引くなり。芎は羿と同じ。然らば則ち彈或いは彈に作るは、蓋し字の誤りしのみならん。『淮南（子）』（「氾論訓」）に又云ふ、「羿は天下の害を除きて、死して宗布と爲る」と。（高誘）注に云ふ、「羿は、古の諸侯なり。此れ堯の時の羿にして、有窮の后の羿に非ず」と。又た云ふ、「日中に踆烏有り」と。踆は、猶ほ蹲のごときなり。『春秋元命苞』（佚書）に云ふ、「陽は三に成る。故に日中に三足の烏有るは、陽精なり」と。「天對」に云ふ、「大澤千里、羣鳥是れ解とす」と。（柳宗元の自）注に云ふ、「烏當に鳥と爲すべし。後人知らずして、上句に配するに因りて、改めて烏と爲すなり」と。『山海經』（「大荒北経」）に云ふ、「大澤は方千里、羣鳥の生ずる所及び解する所なり」と。又、『穆天子傳』に曰く、「曠原の野に至る比、飛鳥の其の羽を解とす所なり」と。然れども文意を以て之を考ふるに、「烏」當に字の如くなるべし。宗元は改めて烏に從ふ、據る所有りと雖ども、鑿に近し」と。

〔語釋〕

○淮南言――現行本『淮南子』巻八「本経訓」に、「堯の時に至るに逮びて、十日竝びて出で、禾稼を焦がし、草木を殺らして、民の食らふ所無し。猰貐・鑿齒・九嬰・大風・封豨・修蛇 皆民の害を爲す。堯 乃ち羿をして鑿齒を疇華の野に誅し、九嬰を凶水の上に殺し、大風を青丘の澤に繳し、上は十日を射て下は猰貐を殺す（逮至堯之時、十日竝出、焦禾稼、殺草木、而民無所食。猰貐・鑿齒・九嬰・大風・封豨・修蛇皆爲民害。堯乃使羿誅鑿齒於疇華之野、殺九嬰於凶水之上、繳大風於青丘之澤、上射十日而下殺猰貐）」とある。○羿――堯の時の人。堯の時、十の太陽が並び出でて民や作物を害したので、命を受けてそのうち九つを射落とした。後出の『淮南子』に拠れば、本稿第三十四輯『楚辭補注』譯注稿（一）にある有窮国の羿とは別人。○九烏――九つの太陽。古、日中に烏がいると言われたことからこの呼称が付いた。○山海經――『山海

経』巻九「海外東経」からの略引。この箇所は、本稿第四十一輯『楚辭補注』譯注稿（八）（第四十九小段）に既出。○扶木――扶桑。東海にあり、日は扶木の枝を登って天に届くという。○注云――『山海経』巻九「海外東経」郭璞注に、「堯乃ち羿をして十日を射しめ、其の九日に中つ。日中の烏盡く死す。「離騷」に所謂る『羿焉くに日を畢て、烏は焉くに羽を落とせる』の者なり（堯乃令羿射十日、中其九日。日中烏盡死。離騷所謂羿焉畢日、烏焉落羽者也）」とある。○傳曰――『山海経』巻九「海外東経」郭璞注に同文がある。○大荒經――『山海経』巻十四「大荒東經」に同文がある。○歸藏易――『歸藏』のこと。殷代の易とされる。一説に、黄帝の易。純坤を以て首とし、万物其の中に歸藏するの義に取る。『連山』・『周易』と合わせて三易という。佚書であり、諸書の注に断片が残るのみである。『漢書』藝文志には著録が無いが、『隋書』經籍志に「歸藏十三巻」と見え、隋代には一応の書物として存在したようである。補注引用部分は、『山海経』巻十四「大荒東經」郭璞注に、「昔者羿（むかし）射を善くし、十日を畢（い）て、果たして之を畢る（昔者羿善射、畢十日、果畢之）」とある。○説文云――『説文解字』巻十三「弓部」では、「射」を「躾（せき）」に作る。○淮南又云――『淮南子』巻十三「氾論訓」に同文がある。○注云――『淮南子』巻十三「氾論訓」高誘注に、「羿は、古の諸侯なり。河伯 人を溺殺するに、羿 其の左目を射て、風伯 人の屋室を壊すに、羿 射て其の膝に中つ。又た九嬰・窫窳（せつわ）の屬（やから）を誅し、天下に功有り。故に死して宋布に託祀せらる。田を祭りて宗布と爲すは、出を謂ふなり。一に曰ふ、今人の室中に祀る所の宗布は是れなり。或いは曰く、『傍布に命ずるを司るなり』と。此の堯の時の羿は、有窮の后羿に非ず（羿、古之諸侯。河伯溺殺人、羿射其左目、風伯壊人屋室、羿射中其膝。又誅九嬰・窫窳之屬、有功於天下。故死託祀於宋布。祭田爲宗布、謂出也。一曰、今人室中所祀之宗布是也。或曰、司命傍布也。此堯時羿、非有窮后羿）」とある。○又云――『淮南子』巻七「精神訓」に同文がある。なお、「踆、猶蹲也」は高誘による注。○春秋元命苞――『春秋』の緯書の一。佚書。○三足烏――太陽の中にいるという三本足のからす。○天對云――『柳宗元集』巻十四「天對」（中華書局　古典文学基本叢書本　一九七九年）に同文がある。○注云――『柳宗元集』巻十四「天對」（中華書局　古典文学基本叢書本　一九七九年）柳宗元自注に同文がある。○山海経云――『山海経』巻十七「大荒北經」に、「大澤は方千里、羣鳥の解せる所有り（有大澤方千里、羣鳥所解）」とある。○穆天子傳――本稿第四十輯『楚辭補注』譯注稿（七）に既出。引用箇所は、『山海経』郭璞注は「比」を「北」に作る。

(113)(114)〈禹之力献功降〉〈省下土四方〉

句絶。

言禹以勤力、獻進其功。堯因使省迨下土四方也。一無四方二字。

〔補曰〕降、下也。省、察也。書曰、惟荒度土功。

〔訓讀文〕

句絶。言ふこころは、禹 勤力を以て、其の功を獻進す。堯因りて省みて下土の四方に迨(およ)ばしむ。一に四方の二字無し。

〔補に曰く〕降は、下なり。省は、察なり。『書』(「益稷」)に曰く、「惟れ荒(おほ)いに土功を度(はか)る」と。

〔語釋〕

○句絶――句の切れること。又、文の切れ目。○書曰――『尚書』巻五「益稷」○土功――土木工事。

(115)(116)〈焉得彼塗山女　而通之于台桑〉

言禹治水、道娶塗山氏之女、而通夫婦之道於台桑之地。焉、一作安。一云、焉得彼塗山之女、而通於台桑。塗、釋文作涂。

〔補曰〕盦、音塗。説文云、會稽山也。一曰、九江當盦也。書曰、娶于塗山、辛壬癸甲。疏引左傳、禹、會諸侯於塗山。杜預云、塗山、在壽春東北。蘇鶚演義云、塗山有四。一者會稽、二者渝州、三者濠州、四者文字音義云、盦山、古國名。夏禹娶之。今宣州當塗縣也。塗山氏女、即女嬌也。史記曰、辛壬娶塗山、癸甲生啓。呂氏春秋曰、禹、娶塗山氏女、不以私害公。自辛至甲四日、復往治水。故江・淮之俗、以辛・壬・癸・甲爲嫁娶日也。淮南曰、禹、治鴻水、通轘轅山、化爲熊。謂塗山

氏曰、欲餉、聞鼓聲乃來。禹跳石、誤中鼓、塗山氏往、見禹方作熊。慙而去、至嵩高山下、化爲石、方生啓。禹曰、歸我子。石破北方而啓生。

〔訓讀文〕

言ふこころは、禹 水を治め、道に塗山氏の女を娶りて、夫婦の道を台桑の地に通ず。焉は、一に安に作る。一に云ふ、「焉くんぞ彼の塗山の女を得て、台桑に通ずる」と。塗、『釋文』に涂に作る。

〔補に曰く〕 𥂴、音は塗。『説文』（「屾部」）に云ふ、「會稽山なり」と。一に曰ふ、「九江當に𥂴とすべきなり」と。『書』（「皋陶謨」）に曰く、「塗山に娶り、辛壬癸甲」と。（孔穎達）疏は『左傳』（哀公七年）を引きて、「禹、諸侯を塗山に會すとき」と。杜預云ふ、「塗山は、壽春の東北に在り」と。『蘇鶚演義』に云ふ、「塗山に四有り。一は會稽、二は渝州、三は濠州、四は『文字音義』に云ふ、『𥂴山は、古の國の名。夏禹之に娶る』と。今の宣州當塗縣なり。塗山氏の女は、即ち女嬌なり」と。『史記』（卷二「夏本紀第二」）に曰く、「辛壬に塗山に娶り、癸甲に啓を生む」と。『呂氏春秋』に曰く、「禹、塗山氏の女を娶り、私を以て公を害せず。辛自り甲に至ること四日、復た往きて水を治む。故に江・淮の俗、辛・壬・癸・甲を以て嫁娶の日と爲すなり」と。『淮南（子）』に曰く、禹、鴻水を治めしとき、轘轅山を通じ、化して熊と爲る。塗山氏に謂ひて曰く、餉せんと欲するに、鼓聲を聞けば乃ち來たれ」と。禹石を跳ねて、誤りて鼓に中たる、塗山氏往きて、禹方に熊と作るを見る。慙ぢて去り、嵩高山の下に至り、化して石と爲る。方に啓を生む。禹曰く、『我が子を歸せ』」と。石北方に破れて啓生まる」と。

〔語釋〕

○塗山――山名。𥂴山と同義。禹が塗山氏の女を娶った場所。○台桑――地名。禹と塗山氏の女が結婚したところ。○説文云――『説文解字』巻十「屾部」に、「𥂴は、會稽山なり。一に曰ふ、九江𥂴に當るなり（𥂴、會稽山。一曰、九江當𥂴也）」

とある。○書曰――『尚書』巻五「益稷」に同文がある。○疏引左傳――『尚書』巻五「益稷」疏に同文がある。『左傳』では、哀公七年に「禹諸侯を塗山に合し、玉帛を執る者は萬國なり（禹合諸侯於塗山、執玉帛者萬國）」とある。○杜預云――『尚書』巻五「益稷」疏に同文がある。『左傳』では、哀公七年に同文がある。○蘇鶚演義云――『蘇氏演義』のこと。四庫提要　子部五　雑家類一によれば、『蘇氏演義』は唐の蘇鶚の著。原書十巻は佚書とされ、輯佚書が伝わる。また『直齋書録解題』でもその存在が確認できる。○文字音義――『開元文字音義』のこと。『開元文字音義』は、唐の玄宗が勅撰した字書。全三十巻、佚書。『新唐書』芸文志に名が見える。○女嬌――塗山氏の女の名。夏の禹王の妃。啓の母。○史記曰――『史記』巻二「夏本紀第二」に、「禹曰はく、『予　涂山（とざん）に娶り、辛壬癸甲、啓を生めども予が子とせず』（禹曰、予娶涂山、辛壬癸甲、生啓予不子）」とある。○啓――禹の子。本稿第四十輯『楚辭補注』譯注稿（十六）（第三十七小段）、第四十七輯『楚辭補注』譯注稿（十三）（第九十一小段）に既出。○呂氏春秋曰――『呂氏春秋』には、「季夏紀第六」等に塗山に関する記述がある。しかし、「嫁娶」の語は全体を通して見えず、佚文と思われる。○淮南曰――『淮南鴻列集解』には、「齋俗訓」に「鴻水（之患）」との記述がある。しかし、禹が熊と化した逸話は見受けられず、佚文と思われる。○轘轅山――山名。河南省偃師縣の東南。

（117）（118）〈閔妃匹合　厥身是繼〉

閔、憂也。言禹所以憂無妃匹者、欲爲身立繼嗣也。

〔補曰〕左傳云、嘉偶曰妃。爾雅云、妃、匹也、對也。

〔訓讀文〕

閔は、憂ふるなり。言ふこころは、禹、妃匹無きを憂ふる所以の者は、身の爲に繼嗣を立てんと欲するなり。

〔補に曰く〕『左傳』（桓公二年）に云ふ、「嘉偶を妃と曰ふ」と。『爾雅』（「釋詁」）に云ふ、「妃は、匹なり、對なり」と。

〔語釋〕

○妃匹――配偶者。夫あるいは妻を指す。○繼嗣――世継ぎ。○左傳云――『春秋左氏傳』「桓公二年」では、「偶」を「耦」に作る。○嘉偶――嘉耦。よい夫婦。○爾雅云――『爾雅』巻一「釋詁第一」に、「攸・部・盍・翕・仇・偶・妃・匹・會は、合なり。仇・讐・敵・妃・知・儀は、匹なり。妃・合・會は、對なり（攸・部・盍・翕・仇・偶・妃・匹・會、合也。仇・讐・敵・妃・知・儀、匹也。妃・合・會、對也）」とある。

(119)(120)〈胡維嗜不同味　而快鼂飽〉

言禹、治水道娶者、憂無繼嗣耳。何特與衆人同嗜欲、苟欲飽快一朝之情乎。故以辛酉日娶、甲子日去、而有啓也。一本、嗜下有欲字。一本、快下有一字。一云、胡維嗜欲同味。維、一作爲。鼂、一作晁、一作朝。

〔補曰〕鼂・晁、並音朝莫之朝。此言禹之所嗜、與衆人異味。衆人所嗜、以厭足其情欲。禹所嗜者、拯民之溺爾。

〔訓讀文〕

言ふこころは、禹 水道を治めて娶る者、繼嗣無きを憂ふるのみ。何ぞ特だ衆人と嗜欲を同じうして、苟くも一朝の情を飽快せんと欲するや。故に辛酉の日を以て娶り、甲子の日に去りて、啓有るなり。一本、嗜の下に欲の字有り。一本、快の下に一の字有り。一に云ふ、「胡維嗜欲同味」と。維は、一に爲に作る。鼂は、一に晁に作り、一に朝に作る。

〔補に曰く〕鼂・晁、並びに音は朝莫（ちょうぼ）の朝なり。此れ言ふこころは、禹の嗜む所、衆人と異味あるなり。衆人の嗜む所、厭を以て其の情欲を足らしむるなり。禹の嗜む所の者は、民の溺を拯（すく）ふのみ」と。

〔語釋〕

○飽快――分別なく欲望を満たす。

（121）（122）〈啓代益作后　卒然離璧〉

益、禹賢臣也。作、爲也。后、君也。離、遭也。璧、憂也。言禹、以天下禪與益。益、避啓於箕山之陽。天下皆去益而歸啓、以爲君。益卒不得立。故曰遭憂也。璧、一作孽、一作孼。

〔補曰〕璧、魚列切。孟子曰、禹薦益於天、益避禹之子於箕山之陰。朝覲・訟獄者、不之益而之啓、曰、吾君之子也。謳歌者、不謳歌益而謳歌啓。曰、吾君之子也。書曰、啓與有扈、戰于甘之野。説者曰、有扈氏與夏同姓、啓繼世以有天下。有扈不服、大戰于甘。故曰卒然離璧也。汲冢書云、益爲啓所殺、非也。天對云、彼呱克臧、俾姒作夏。獻后益于帝、諄諄以不命。復爲叟者、曷戚曷孽。

〔訓讀文〕

益は、禹の賢臣なり。作は、爲るなり。后は、君なり。離は、遭ふなり。璧は、憂なり。言ふこころは、禹、天下を以て益に禪與す。益、啓を箕山の陽（みなみ）に避く。天下皆益を去りて啓に歸し、以て君と爲る。益卒に立つを得ず。故に憂ひに遭ふと曰ふなり。璧（げつ）は、一に孽（げつ）に作り、一に孼（げつ）に作る。

〔補に曰く〕璧は、魚列の切。『孟子』（「万章章句上」）に曰く、「禹 益を天に薦め、益 禹の子を箕山の陰（きた）に避く。朝覲・訟獄する者、益に之かずして啓に之く。曰く、『吾が君の子なり』と。謳歌する者、益を謳歌せずして啓を謳歌す。曰く、『吾が君の子なり』」と。『書』（「甘誓」序）に曰く、「啓と有扈と、甘の野（や）に戰はんとす」と。説く者曰く、「有扈氏は夏と同姓にして、啓、世を繼ぎて以て天下を有つ。有扈服せず、大いに甘に戰ふ。故に卒然として璧（うれひ）に離（かか）ると曰ふなり」と。『汲冢（きゅうちょう）

（周）書』に云ふ、「益は啓の殺す所と爲るは、非なり」と。「天對」に云ふ、「彼の呱するもの克く臧し、姒をして夏と作さしむ。后益を帝に獻ぜしも、諄諄として以て命ぜられず。復た叟耆と爲す、戚曷ぞ孽へん」と。

〈語釋〉

○離――反訓。ここでは、「離騷」の「離」と同様に「遭う」の意。○益――拍益のこと。舜の時の人。皐陶の子。禹の治水を補佐して功を成したので、禹が天下を禪譲しようとしたが、箕山に避けて受けなかった。○箕山――山名。伝説上の隠者である許由が堯帝の禪譲をことわって隠れ住んだとされる。山の姿が箕（み。脱穀の際に使用するちりとり状の農具）に似ていると言われる。○孟子曰――『孟子』巻九上「万章章句上」に、「禹　益を天に薦むること、七年。禹　崩じ、三年の喪畢はりて、益　禹の子を箕山の陰に避く。朝覲・訟獄する者、益に之かずして啓に之く。曰はく、『吾が君の子なり』と。謳歌する者、益を謳歌せずして啓を謳歌す。曰く、『吾が君の子なり』と（禹薦益於天、七年。禹崩、三年之喪畢、益避禹之子於箕山之陰。朝覲・訟獄者、不之益而之啓。曰、吾君之子也。謳歌者、不謳歌益而謳歌啓。曰、吾君之子也）」とある。○書曰――『尚書』巻七「甘誓」に同文がある。○汲冢書云――『汲冢書』は、晋の汲郡の人である不準が、魏の襄王（一説安釐王）の墓を開いて得た先秦の古書をまとめていう。ここでは、古の人物とされる益に関する記述のため、『汲冢書』のなかでも『汲冢周書』（『逸周書』ともいう）が典拠と思われるが、現行の『逸周書』には同文・類文がなく、佚文と思われる。○天對云――『柳宗元集』「天對」に同文がある。○諄諄――ねんごろに諭し示すさま。○叟耆――老人。

（123）（124）〈何啓惟憂　而能拘是達〉

言天下所以去益就啓者、以其能憂思道德、而通其拘隔。拘隔者、謂有扈氏叛啓。啓、率六師以伐之也。

〔補曰〕惟、思也。拘、執也。禹嘗薦益於天矣。啓賢能敬承繼禹之道。憂思天下、因民心之歸、代益作后。因民心之不予、以伐有扈。是能變通而不拘執也。

〔訓讀文〕

言ふこころは、天下益を去り、啓に就く所以の者は、其れ能く道德を憂思して、其の拘隔に通ずるを以てすればなり。拘隔する者は、有扈氏の啓に叛くを謂ふ。啓、六師を率ゐて以て之を伐つなり。

〔補に曰く〕惟は、思ふなり。拘は、執るなり。禹は嘗て益を天に薦む。啓は賢にして能く敬みて禹の道を承繼す。天下を憂思し、民心の歸するに因り、益に代はりて后と作る。民心の不予に因りて、以て有扈を伐つ。是れ能く變通して拘執せざるなり。

〔語釋〕

○有扈――古の國の名。現在の陝西省鄠縣の北に位置する。夏の后啓に滅ぼされる。○六師――六軍のこと。天子の軍。七万五千人の稱。○不予――心に喜ばない。

(125)(126)〈皆歸躾籀　而無害厥躬〉

躾、行也。籀、窮也。言有扈氏所行、皆歸於窮惡。故啓誅之。長無害於其身也。躾、一作射。籀、一作鞠。

〔補曰〕凡能取中、皆曰射。籀、窮也。音菊。此言啓之所爲、皆歸於中理而窮情。夫孰能害之者。

〔訓讀文〕

躾(せき)は、行ふなり。籀(きく)は、窮むるなり。言ふこころは、有扈氏の行ふ所、皆惡を窮むるに歸す。故に啓 之を誅す。長く其の身を害する無きなり。躾は、一に射に作る。籀は、一に鞠(きく)に作る。

〔補に曰く〕凡そ能く中を取る、皆射と曰ふ。籀は、窮なり。音は菊。此れ言ふこころは、啓の爲す所、皆理に中たりて情

を窮むるに歸す。夫れ孰れか能く之を害する者ぞ。

〈語釋〉

なし。

(127)(128)〈何后益作革　而禹播降〉

后、君也。革、更也。播、種也。降、下也。言啓所以能變更益、而代益爲君者、以禹平治水土、百姓得下種百穀。故思歸啓也。〔補曰〕據上所言、則啓固賢矣。然禹之播降、待益作革、然後能成功。特天與子、則與子、故益不有天下耳。焚山澤、奏鮮食、所謂作革也。稷降播種而曰禹播降者、水土平然後嘉穀可殖故也。降、乎攻切。見騷經。天對云、益革民艱、咸粲厥粒。惟禹授以土、爰稼萬億。

〈訓讀文〉

后は、君なり。革は、更(あらた)むるなり。播は、種(ま)くなり。降は、下るなり。言ふこころは、啓 能く益を變更し、而して益に代はりて君と爲る所以の者は、禹の水土を平治するを以て、百姓は百穀を下種するを得しむればなり。故に啓に歸せんことを思ふなり。

〔補に曰く〕上に言ふ所に據れば、則ち啓 固より賢なり。然れども禹の播降して、益の革を作すを待ちて、然る後に能く功を成す。特だ天、子に與ふれば、則ち子に與ふ。故に益 天下を有たざるのみ。山澤を焚き、鮮食を奏し、所謂る革を作るなり。稷降りて播種するに禹は播降すと曰ふは、水土平らかにして然る後に嘉穀殖(ふ)すべきが故なり。降は、乎攻の切。「騷經」に見ゆ。「天對」に云ふ、「益は民の艱を革めて、咸(みな)厥の粒を粲(しら)く。惟れ禹 授くるに土を以てして、爰(ここ)に稼 萬億あり」と。

〔語釋〕

○播降――たねをまく。○下種――①たねをおろす。下子。②身分卑しい者。ここでは、本文「播降」を鑑みて、種を蒔く意で解釈する。○稷――たかきび。○嘉穀――良い穀物。立派な五穀。稷・黍の類。○見騷經――「離騷」「惟庚寅吾以降」補注に「降は、乎攻の切（降、乎攻切）」とある。本稿第三十四輯『楚辭補注』譯注稿（一）（第一小段）を参照されたい。○天對云――『柳宗元集』「天對」に同文がある。○粲――穀物をよくついて精白する。

129 130〈啓棘賓商　九辯九歌〉

棘、陳也。賓、列也。九辯・九歌、啓所作樂也。言啓能修明禹業、陳列宮・商之音、備其禮樂也。

〔補曰〕史記、契佐禹治水有功、封於商、興於唐・虞・大禹之際。此言賓商者、疑謂待商以賓客之禮。棘、急也。言急於賓商也。九辯・九歌、享賓之樂也。

〔訓讀文〕

棘は、陳なり。賓は、列なり。「九辯」・「九歌」は、啓の作る所の樂なり。言ふこころは、啓能く禹の業を修明し、宮・商の音を陳列し、其の禮樂を備ふるなり。

〔補に曰く〕『史記』（「殷本紀」）に、契（せつ）禹の治水を佐けて功有りて、商に封ぜられ、唐・虞・大禹の際に興る」と。此に賓商と言へる者は、疑ふらくは商に待するに賓客の禮を以てするを謂ふならん。棘は、急なり。賓商に急なるを言ふなり。「九辯」・「九歌」は、賓を享するの樂なり。

〔語釋〕

○啓棘賓商――補注は、棘は「急」、すなわち速やかの意であり、「商」は、五音の一つと解釈する。朱注に、「竊かに疑ふらくは、棘當に夢に作るべく、商當に天に作るべし。篆文相似たるを以て誤れるなり（竊疑、棘當作夢、商當作天。以篆文相似而誤也）」とあり、これに従えば「啓棘（ゆめ）に商（てん）に賓し」との訓読となる。本譯注稿では、補注の解釈に従い「啓棘（すみ）やかに商に賓し」と訓読した。○史記――『史記』巻三「殷本紀第三」に、「契 長じて禹を佐け、治水に功有り。帝舜 乃ち契に命じて曰く、『百姓親しまず、五品訓（そろ）はず。汝 司徒と爲り、敬みて五教を敷き、五教寛に在れ』と。商に封ぜられ、姓を子氏と賜ふ。契は唐・虞・大禹の際に興り、功業百姓に著はれ、百姓以て平らかなり（契長而佐禹、治水有功。帝舜乃命契曰、百姓不親、五品不訓。汝爲司徒、而敬敷五教、五教在寛。封于商、賜姓子氏。契興於唐・虞・大禹之際、功業著於百姓、百姓以平）」とある。

（131）（132）〈何勤子屠母　而死分竟地〉

勤、勞也。屠、裂剝也。言禹腷剝母背而生、其母之身、分散竟地。何以能有聖德、憂勞天下乎。地、一作墜。

〔補曰〕腷、判也。音䮠。史記楚世家、陸終生子六人。坼剖而産焉。干寶曰、前志所傳、修己背坼而生禹、簡狄胸剖而生契。歴代久遠、莫足相證。魏黄初五年、汝南屈雍妻生男。從右胳下水腹上出。而平和自若。母子無恙。詩云、不坼不副、無災無害。原詩人之旨、明古之婦人、常有坼剖而産者矣。又有因産而遇災害者、故美其無害也。禹母事、出帝王世紀。禹以勤勞修鯀之功。故曰勤子也。上云九辯・九歌、言啓以禹故、得享備樂。何以修己生禹而反遇災害邪。言坼剖而産、則有之。死分竟地、未必然也。竟地、猶言竟天也。唐段成式云、迸分竟地、蓋用此語。

〔訓讀文〕

勤は、勞なり。屠は、裂剝なり。言ふこころは、禹 母の背を腷剝（ふくはく）して生まれ、其の母の身、分散して地に竟はる。何を以

てか能く聖德有りて、天下を憂勞するか。地は、一に墜に作る。

〔補に曰く〕牖は、判なり。音は齵。『史記』「楚世家」に、陸終 子六人を生む。坼剖して産まる」と。干寳（『搜神記』）曰く、「前志傳ふる所、修己の背坼けて禹を生み、簡狄の胸剖けて契を生む。歴代久遠なるも、相證するに足る莫し。魏の黄初五年に、汝南の屈雍の妻 男を生む。右胳從り水を下し腹上に出づ。而して平和なること自若たり。母子恙無し」と。『詩』（大雅・「生民」）に云ふ、「坼けず副けず、災無く害無かりき」と。詩人の旨を原ぬるに、古の婦人、常に坼剖して産む者有るを明らかにす。又た産むに因りて災害に遇ふ者有り、故に其の害無きを美するなり。禹の母の事は、『帝王世紀』に出づ。禹 勤勞を以て鯀の功を修む。故に勤子と曰ふなり。上に「九辯」・「九歌」を云ふ、言ふこころは、啓 禹を以ての故に、享を得て樂を備ふ。何を以てか修己 禹を生みて反りて災害に遇ふや。言ふこころは、坼剖して産めば、則ち之れ有り。死分して地に竟ふるは、未だ必ずしも然らざるなり。地に竟はるは、猶ほ天を竟ふと言ふがごときなり。唐の段成式云ふ、「迸分して地に竟ふ」と。蓋し此の語を用ひしならん。

〔語釋〕

○史記楚世家――『史記』「楚世家」に同文がある。○陸終――上古の人。伝説上の火の神である祝融の子。○干寳曰――『搜神記』には同文・類文見当たらず。佚文か。○修己――夏の禹王の母。鯀の妃。○簡狄――帝嚳の妃。玄鳥（つばめ）の堕とした卵を呑んで契を生んだと伝わる。○右胳――右わき。○詩云――『詩経』大雅「生民」に同文がある。○出帝王世紀――『帝王世紀』は、晉の皇甫謐が撰した史書。全一巻、佚書。○鯀――禹の父で四凶の一人。舜に羽山で処刑された。○段成式云――段成式は、唐の学者。字は柯古。校書郎となり、博学強記。主な著作に『酉陽雑俎』がある。補注引用箇所は、『酉陽雑俎』續集巻五「寺塔記上」に同文がある。

〔本文〕

(133) 帝降夷羿　帝　夷羿を降して、
(134) 革孽夏民　孽を夏民に革む。
(135) 胡躬夫河伯　胡ぞ夫の河伯を躬て、
(136) 而妻彼雒嬪　而して彼の雒嬪を妻とする。
(137) 馮珧利決　珧を馮たし決を利くし、
(138) 封豨是躬　封豨を是れ躬る。
(139) 何獻蒸肉之膏　何ぞ蒸肉の膏を獻じて、
(140) 而后帝不若　而して后帝若はざる。
(141) 浞娶純狐　浞　純狐を娶るに
(142) 眩妻爰謀　眩妻と爰に謀る。
(143) 何羿之躬革　何ぞ羿の躬革なるに、
(144) 而交吞揆之　而も交に之を吞揆する。
(145) 阻窮西征　阻窮して西に征くに、
(146) 巖何越焉　巖　何ぞ越ゆる。
(147) 化爲黃熊　化して黃熊と爲るに、
(148) 巫何活焉　巫　何ぞ活かせる。
(149) 咸播秬黍　咸　秬黍を播かしめんとして、
(150) 莆雚是營　莆雚　是れ營む。
(151) 何由并投　何に由りてか并はせ投じて、
(152) 而鮌疾脩盈　而も鮌の疾　脩く盈つ。

(153) 白蜺嬰茀　白蜺嬰茀（はくげいえいふつ）、
(154) 胡爲此堂　胡爲れぞ此の堂においてする。
(155) 安得夫良藥　安くんぞ夫の良藥を得て、
(156) 不能固臧　固く臧する能はざるか。

〔通釋〕

天帝は夷羿を天上から遣わして、夏の民の憂いを改め除かせた。それなのに、どうして羿はあの河伯を射、あの洛水の神女慮を妻にしたのであろうか。

羿は平貝の殼で飾った弓を引き絞り、弦かけをうまく使って、大猪を射とめた。なぜその脂肉を冬の祭りに供えたのに、天帝はその行為をそのまま認めて下さなかったのか。

寒浞が羿の妻の純狐を娶（めと）るについては、情欲に目の眩んだその妻と、共謀したのである。どうして羿のような、犀の革の盾にも射込む強弓の男なのに、浞と純狐とが一緒になってこれを滅したのであろうか。

鮌はけわしい道に苦しみながら西に行くのに、大岩をば、どうやって超えたであろうか。死後黄熊に身を変じたというが、巫はどうやってそれを復活させ、転生させたであろうか。

鮌は人民に皆黒黍や黍の種を蒔かしめようとして、蒲や荻の生茂る湿地を計画立てて治めた。それなのに、どんなわけがあって、四凶として他の悪人と一緒に放逐して、しかも、鮌の悪名だけが特に天下に満ちたのであろうか。

王子僑は白蜺に身を変じて、うねうねとしてたなびいたというが、なぜこの堂上に降ったのであろうか。崔子文はなぜあの良薬を得て、大事にしまっておけなかったのだろうか。

〔洪興祖補注〕

帝、天帝也。夷羿、諸侯、殺夏后相者也。革、更也。孽、憂也。言羿弒夏家、居天子之位、荒淫田獵、變更夏道、爲萬民憂患。天對云、夷羿滔淫、割更后相。夫孰作厥孽、而誣帝以降。

〔補曰〕左氏云、在帝夷羿、冒于原獸、忘其國恤、而思其麀牡。武不可重。用不恢于夏家。

(133)(134)〈帝降夷羿　革孽夏民。〉

〔訓讀文〕

帝は、天帝なり。夷羿は、諸侯にして、夏后相を弒する者なり。革とは、更むるなり。孽は、憂ひなり。言ふこころは、羿夏家を弒し、天子の位に居る。荒淫田獵す。夏の道を變更して、萬民の憂患と爲ると。

「天對」に云ふ、「夷羿滔淫にして、割きて后相を更む。夫れ孰か厥の孽を作して、帝を誣ひて以て降すや」と。

〔補に曰く〕『左氏（襄公四年）』云ふ、「帝夷羿在りて、原獸を冒り、其の國恤を忘れて、其の麀牡を思ふ。武は重んずべからず。用て夏家を恢いにせず」と。

〔語釋〕

○夏家――禹が建てた夏の王朝。○荒淫――酒色にすさみ溺れる。○田獵――不時に大掛かりな狩りを催す。○天對云――『柳宗元集』巻十四「天對」に同文あり。○滔淫――荒淫と同じ。○左氏云――『春秋左氏傳』巻二十九「襄公四年」の傳に同文あり。○冒――『春秋左氏傳』巻二十九「襄公四年」の杜預注に「冒は、貪るなり（冒、貪也）」とある。○國恤――国政上の憂うべき大事。○麀牡――大・漢ともに立項なし。ここでは、雌鹿と雄鹿。

(135)(136)〈胡躾夫河伯　而妻彼雒嬪〉

胡、何也。雒嬪、水神、謂宓妃也。傳曰、河伯化爲白龍、游于水旁、羿見、躾之、眇其左目。河伯上訴天帝、曰、爲我殺羿。天帝曰、爾何故得見躾。河伯曰、我時化爲白龍出遊。天帝曰、使汝深守神靈、羿何從得犯。汝今爲虫獸、當爲人所躾、固其宜也。羿何罪歟。深、一作保。羿又夢與雒水神宓妃交接也。一本胡下有羿字。躾、一作射。

〔補曰〕躾、食亦切、下同。妻、心計切。

此言射河伯、妻雒嬪者、何人乎。乃堯時羿、非有窮羿也。革孽夏民、封豨是射、乃有窮羿耳。淮南云、河伯溺殺人、羿射其左目。注云、堯時羿射十日、繳大風、殺窫窳、斬九嬰、射河伯。

〔訓讀文〕

胡は、何なり。雒嬪は、水神、宓妃を謂ふなり。

傳に曰く、「河伯 化して白龍と爲り、水旁に遊ぶ。羿見て之を射て、其の左目を眇にす。河伯 天帝に上訴して、曰く『我が爲に羿を殺せ』と。天帝曰く『爾 何の故に射らるるを得るや』と。河伯曰く『我 時に化して白龍と爲りて出遊すればなり』と。天帝曰く『汝をして深く神靈を守らしめば、羿 何に從りて犯すを得んや。汝 今蟲獸と爲る、當に人の射る所と爲るべし。固より其れ宜べなり。羿に何の罪あらんや』」と。羿又た夢に雒水の神 宓妃と交接するなり。一本に胡の下に羿の字有り。躾は、一に射に作る。

〔補に曰く〕躾は、食亦の切、下同じ。妻は、心計の切。此れ言ふこころは、河伯を射て、雒嬪を妻とするは、何人かと。乃ち堯の時の羿にして、有窮の羿に非ざるなり。「孽を夏民に革めむ」・「封豨を是れ射る」は、乃ち有窮の羿なるのみ。『淮南』（氾論訓）に云ふ、「河伯 人を溺殺し、羿 其の左目を射る」と。注（俶真訓）に云ふ、「堯の時 羿 十日を射て、大風を繳へ、窫窳を殺し、九嬰を斬り、河伯を射る」と。

〈語釋〉

○宓妃――伏羲氏の女。洛水に溺れて、その水神となった。「離騷」に「吾れ豊隆をして雲に乗り、宓妃の在る所を求めしむ（吾令豊隆乘雲兮、求宓妃之所在）」とある。本稿第四十二輯『楚辭補注』譯注稿（九）に既出。○傳曰――佚文。『楚辭章句疏證』（『楚辭章句疏證』黄靈庚疏證／中華書局／二〇〇七年）第二冊　巻四「天問」の疏證に「章句 傳を引くも、未だ今書を見ず、其の出づる所を知らず。此れ問ふ所の事は、三代以往の古史ならん（章句引傳、未見今書、不知其所出。此所問之事、三代以往古史）」とある。○眇――目がつぶれて見えなくなること。○淮南云――『淮南子』巻十三「氾論訓」の高誘注に同文あり。○注云――『淮南子』巻二「俶真訓」の高誘注に同文あり。○河伯――黄河の神。「楚辭」九歌、河伯にみえる。本稿第五十六輯『楚辭補注』譯注稿（二十三）に既出。○窫窳――獣の名。人を食らう獣。○九嬰――水や火の物の怪。人に害をなす。

（137）（138）〈馮珧利決　封豨是躬〉

馮、挾也。珧、弓名也。決、躬韝也。封豨、神獣也。言羿不修道德、而挾弓躬韝、獵捕神獣、以快其情也。躬、一作射。

〔補曰〕馮、音憑。珧、音遙。

爾雅、弓以蜃者謂之珧。注云、用蜃飾弓兩頭。因取其類以爲名。又曰、蜃小者珧。注云、王珧、即小蚌也。説文云、珧、蜃甲也。所以飾物。儀禮有決遂。注云、決、猶闓也。以象骨爲之、著右大擘指以鈎弦、闓體也。遂、躬韝也。以韋爲之、所以遂弦也。説文云、韝、射臂決也。封、大也。豨、虚豈切。方言云、豬、南楚謂之豨。淮南云、堯時封豨長蛇、皆爲民害。堯使羿斷脩蛇、禽封豨。此言有窮羿亦封豨是射、而反爲民害也。左傳曰、樂正后夔生伯封。實有豕心。貪惏無厭、忿類無期、謂之封豕、有窮后羿滅之。此則窮奇饕餮之類、以悪得名者。

〔訓讀文〕

馮は、挾むなり。珧は、弓の名なり。決は、躲韝なり。封豨は、神獸なり。

言ふこころは羿は道徳を修めずして、弓 射韝を挾み、神獸を獵捕し、以て其の情を快くするなり、と。

〔補に曰く〕馮 音は憑。珧 音は遙。『爾雅』（釋器）に、「弓 蜃を以てする者 之を珧と謂ふ」と。注（郭璞）に云ふ、「蜃を用て弓の兩頭を飾る。因りて其の類を取りて以て名と爲す」と。又た曰く（『爾雅』釋魚）、「蜃の小なる者を珧といふ」と。注（郭璞）に云ふ、「王珧は、即ち小蚌なり」と。『説文』（王部）に云ふ、「珧は、蜃甲なり。物を飾る所以なり。」『儀禮』（鄉射禮第五）に「決遂」有り。注（鄭玄）に云ふ、「決は、猶ほ闓のごときなり。象骨を以て之を爲り、右の大擘指に著けて以て弦を鈎け、體を闓くなり。遂は、躲韝なり。韋を以て之を爲り、遂弦する所以なり」と。『説文』（韋部）に云ふ、「韝は、射臂決なり。」封は、大なり。豨は、虚豈の切。『方言』に云ふ、「豬は、南楚 之を豨と謂ふ」と。『淮南』（本經訓）に云ふ、「堯の時 封豨・長蛇、皆民の害と爲る。堯 羿をして脩蛇を斷たせ、封豨を禽にせしむ」と。此れ言ふこころは、有窮の羿も亦た封豨を是れ射て、反つて民の害と爲るなり。『左傳』（昭公二十八年）に曰く、「樂正后夔 伯封を生む。實に豕心有り。貪婪にして厭くこと無く、忿類にして期無ければ、之を封豕と謂ひ、有窮の后羿 之を滅ぼす」と。此れ則ち窮奇・饕餮の類にして、悪を以て名を得る者なり。

〔語釋〕

○躲韝――ゆごて。弓を射るとき、右の親指にはめて、弦をかけるもの。○爾雅――『爾雅』巻五「釋器第六」に同文あり。○注云――『爾雅』巻五「釋器第六」郭璞注に同文あり。○又曰――『爾雅』巻九「釋魚第十六」に同文あり。○説文云――『説文解字』巻一上玉（王）部に同文あり。○蜃甲――『説文解字義證』に「蜃甲なる者は、萬震海物異名記に、江瑶の柱、厥の甲美にして瑶玉の如し（蜃甲也者、萬震海物異名記、江瑶柱、厥甲美如瑶玉）」とある。つまり、蜃甲とは、弓につけられた螺鈿の模様のこと。○儀禮――『儀禮』巻十一「鄉射禮第五」に同文あり。○注云――『儀禮』巻十一「鄉射禮第五」

の鄭注に同文あり。○大擘指――親指のこと。○韋――なめし革のこと。○遂弦――ゆごて（弓を射るときに用いる手袋）と弦。○説文云――『説文解字』巻五下韋部に「韝は、臂衣なり（韝、臂衣也）」とある。しかし、段注には、「各本 射臂決に作るなり（各本作射臂決也）」とある。また、『義證』には「射臂決なる者は、李善注 李陵 蘇武に荅ふるの書 引きて臂衣に作るなり（射臂決也者、李善注李陵荅蘇武書引作臂衣也）」とある。○方言云――『方言』巻八に同文あり。○淮南云――『淮南子』巻八「本經訓」に「逮びて堯の時に至り、…封豨・長蛇、皆 民の害と爲る。堯乃ち羿をして…（中略）…脩蛇を洞庭に斷たせ、封豨を桑林に禽にせしむ。（逮至堯之時…封豨・長蛇皆爲民害。堯乃使羿…（中略）…斷脩蛇於洞庭、禽封豨於桑林。）」とある。○左傳曰――『春秋左氏傳』巻五十二「昭公二十八年」の傳に「樂正后夔 之を取り、伯封を生む、實に豕心有り、貪惏にして饜くこと無く、忿類にして期無ければ、之を封豕と謂ひ、有窮の后羿 之を滅す。（樂正后夔取之、生伯封、實有豕心、貪惏無饜、忿類無期、謂之封豕、有窮后羿滅之。）」とある。○饜――『春秋左氏傳』巻五十二「昭公二十八年」の杜預注に「饜、亦た厭に作る（饜、亦作厭）」とある。○樂正后夔――『春秋左氏傳』巻五十二「昭公二十八年」の杜預注に「夔は、舜典樂の君長。（夔、舜典樂之君長。）」とある。夔は舜の朝廷の楽長をいう。○豕心――貪欲で無恥な心。○貪惏――きわめて欲深い。○忿類――わがまま勝手で怒りやすい。○封豕――大きな豚。封豨。○窮奇・饕餮――堯の時の四凶の一。四凶は、堯舜の時の悪名高い四人の人物、窮奇・饕餮・渾敦（こんとん）・檮杌（とうげつ）をいう。一説に共工（きょうこう）・驩兜（かんとう）・三苗（さんびょう）・鯀（こん）をいう。

（139）（140）〈何獻蒸肉之膏　而后帝不若〉

蒸、祭也。后帝、天帝也。若、順也。言羿獵殃封豨、以其肉膏際天帝、天帝猶不順羿之所爲也。蒸、一作烝。

〔補曰〕冬祭曰蒸。膏、脂也。

詩曰、皇皇后帝。謂天帝也。天對云、夸夫快殺、鼎豨以慮飽。馨膏腴帝、叛德恣力。胡肥台舌喉、而濫厥福。

〔訓讀文〕

蒸は、祭るなり。后帝は、天帝なり。若は、順ふなり。

言ふこころは、羿 封豨を獵射し、其の肉膏を以て天帝を祭るも、天帝 猶ほ羿の爲す所に順はざるなり。蒸は、一に烝に作る。

〔補に曰く〕冬祭を蒸と曰ふ。膏は、脂なり。

『詩』（魯頌・駉之什「閟宮」）に曰く、「皇皇たる后帝」は、天帝を謂ふなり。「天對」に云ふ、「夫の快の殺を夸りて、豨を鼎にして以て飽を慮る。膏腴を帝に馨し、德に叛きて力を恣にす。胡ぞ台が舌喉を肥やして、厥の福を濫にする」と。

〔語釋〕

○詩曰――『詩經』巻二十之二魯頌・駉之什「閟宮」に同文あり。○「天對」云――『柳宗元集』巻十四「天對」に同文あり。※楊萬里「天問天對解」に「台 音は怡、我なり。（台音怡、我也。）」とある。

(141)（142）〈淫娶純狐　眩妻爰謀〉

淫、羿相也。爰、於也。眩、惑也。言淫娶於純狐氏女、眩惑愛之、遂與淫謀殺羿也。

〔補曰〕寒淫見騷經。

〔訓讀文〕

淫は、羿の相なり。爰は、於なり。眩は、惑なり。言ふこころは、淫 純狐氏の女を娶り、眩惑して之を愛し、遂に淫と羿を殺さんことを謀るなりと。

〔補に曰く〕寒淫は「騷經」に見ゆ。

〔語釋〕

○寒浞――本稿第三十九輯『楚辭補注』譯注稿（六）に既出。

（143）（144）〈何羿之躬革　而交吞揆之〉

吞、滅也。揆、度也。言羿好躬獵、不恤政事法度、浞交接國中、布恩施德、而吞滅之也。一無革字。

〔補曰〕禮云、貫革之射。左傳云、蹲甲而射之、徹七札焉。言有力也。羿之射藝如此。唯不恤國事、故其衆交合而吞滅之。且揆度其必可取也。

〔訓讀文〕

吞は、滅ぶなり。揆は、度（はか）るなり。

言ふこころは羿好んで躬獵し、政事法度を恤（うれ）へず、浞國中に交接して、恩を布き德を施して之を吞滅するなりと。

〔補に曰く〕『禮』（樂記）に云ふ、「貫革の射」と。『左傳』（成公十六年）に云ふ、「蹲甲（そんこう）して之を射るに、七札を徹す」と。有力を言ふなり。羿の射藝此くの如し。唯だ國事を恤へず、故に其の衆　交合して之を吞滅す。且つ其の必ず取るべきを揆（き）度（たく）するなり。

〔語釋〕

○禮云――『禮記』巻三十九「樂記」に同文あり。○左傳云――『春秋左氏傳』巻二十八「成公十六年」の傳に同文あり。

○蹲甲――鎧をすえおく。○七札――鎧の七枚の札。○有力――大いなる力。○揆度――推し量る。

(145)(146)〈阻窮西征　巖何越焉〉

阻、險也。窮、窘也。征、行也。越、度也。言堯放鯀羽山、西行度越岑巖之險、因墮死也。

〔補曰〕羽山東裔。此云西征者、自西徂東也。上文言永遏在羽山、夫何三年不施、則鯀非死於道路。此但言何以越巖險而至羽山耳。

〔訓讀文〕

阻は、險しきなり。窮は、窘(くる)しむなり。征は、行くなり。越は、度(わた)るなり。

言ふこころは堯 鯀を羽山に放ち、西に行きて岑巖(しんがん)の險しきを度越し、因りて墮死するなりと。

〔補に曰く〕羽山の東裔なり。此れ西に征くと云ふ者は、西自り東に徂くなり。上文に言ふ永く遏(とど)めて羽山に在り、夫れ何ぞ三年施さざる、と。則ち鯀 道路に死するに非ず。此れ但だ何を以て巖險を越えて羽山に至ると言ふのみ、と。

〔語釋〕

○鯀・羽山・東裔――本稿第三十八輯『楚辭補注』譯注稿（五）に既出。○岑巖――高く險しいさま。

(147)(148)〈化爲黃熊　巫何活焉〉

活、生也。言鯀死後化爲黃熊、入於羽淵、豈巫醫所能復生活也。一本化下有而字。

〔補曰〕左傳曰、昔堯殛鯀于羽山、其神化爲黃熊、以入于羽淵。實爲夏郊、三代祀之。國語作黃能。按熊、獸名。能、奴來切、三足鱉也。説者曰、獸非入水之物。故是鱉也。一云、既爲神、何妨是獸。説文云、能、熊屬、足似鹿。然則能既熊屬、又爲鱉類。東海人祭禹廟、不用熊肉及鱉爲膳。斯豈鯀化爲二物乎。抑亦以左傳國語不同、兼存之也。

〔訓讀文〕

活は、生くるなり。言ふこころは鯀 死して後 化して黄熊と爲り、羽淵に入る。豈に巫醫の能く復た生活する所ならんや、と。一本に化の下に而の字有り。

〔補に曰く〕『左傳』（昭公七年）に曰く、「昔堯 鯀を羽山に殛せしに、其の神 化して黄熊と爲り、以て羽淵に入る。實に夏の郊を爲して、三代之を祀る」と。『國語』（晉語）に黄能に作る。按ずるに熊は、獸の名なり。能は、奴來の切。三足の鱉なり。（『春秋左氏傳』巻四十四「昭公七年」杜預注）「説く者曰く、『獸は水に入るの物に非ず。故に是れ鱉なり』と。一に云ふ『既に神と爲れば、何ぞ是れ獸たるに妨げん』」と。『説文』（能部）に云ふ、「能は、熊の屬、足は鹿に似たり」と。然らば則ち能は既に熊の屬にして、又た鱉（べつ）の類爲り。東海の人は禹廟を祭るに、熊肉及び鱉を用て膳と爲さず。斯れ豈に鯀化して二物と爲らんや、と。抑そも亦た『左傳』・『國語』同じからざるを以て、之を兼ね存するなり、と。

〔語釋〕

○左傳曰――『春秋左氏傳』巻四十四「昭公七年」の傳に同文あり。○説者曰――『春秋左氏傳』巻四十四「昭公七年」の杜預注に同文あり。○説文云――『説文解字』巻十上能部に同文あり。○黄熊――（大／一二‐九七九）鯀の霊が化してなったという獸。○巫醫――祈祷により病を治した。○殛――はりつけにして殺す。また、罪を責めて殺す。○鱉――すっぽんのこと。

(149)(150)〈咸播秬黍　莆雚是營〉

咸、皆也。秬黍、黒黍也。雚、草名也。營、耕也。言禹平治水土、萬民皆得耕種黒黍於雚蒲之地、盡爲良田也。一作黄雚、一作莆雚。

〔補曰〕詩云、維秬維秠。爾雅曰、秬、黒黍。秠、一稃二米。秠亦黒黍、但中米異爾。秬、音巨。説文、黍、禾屬而黏也。莆、疑即蒲字。蒲、水草、可以作席。李商隱詩云、直是滅雚莆。與圓同韻。雚、蔖也。音丸。與萑同。左氏云、萑苻之澤。是也。以莆爲黄、以雚爲雚、皆字之誤耳。天對云、維莞維蒲、維菰維蘆。

〔訓讀文〕

咸は、皆なり。秬黍は、黒黍なり。雚は、草名なり。營は、耕すなり。

言ふこころは、禹 水土を平治し、萬民 皆黒黍を雚蒲の地に耕種するを得て、盡く良田と爲るなり、と。一に黄雚に作り、一に莆雚に作る。

〔補に曰く〕『詩』（大雅・生民之什「生民」）に云ふ、「維れ秬維れ秠」と。『爾雅』（釋草）に曰ふ、「秬は、黒黍。秠は、一稃に二米あるなり」と。秠も亦た黒黍、但だ中米異なるのみ。秬、音は巨。『説文』（黍部）に、「黍は、禾の屬にして黏あるなり」と。莆は、疑ふらくは即ち蒲の字ならん。蒲は、水草にして、以て席を作るべし。李商隱の詩に云ふ、「直だ是れ雚莆を滅くのみ」と。圓と同韻。雚は、蔖なり。音は丸。萑と同じ。『左氏』（昭公二十年）に云ふ、「萑苻の澤」とは是れなり。莆を以て黄と爲す、雚を以て雚と爲すは、皆字の誤りなるのみ。「天對」に云ふ、「維れ莞維れ蒲、維れ菰維れ蘆」と。

〔語釋〕

○詩云――『詩經』卷十七之一大雅・生民之什「生民」に同文あり。○爾雅曰――『爾雅』卷八「釋草第十三」に同文あり。○説文――『説文解字』卷七上黍部に同文あり。○李商隱詩云――『李商隱詩歌集解』「有感二首」は「雚莆」を「萑苻」に作る。

○左氏云――『春秋左氏傳』巻四十九「昭公二十年」の傳に同文あり。○天對云――『柳宗元集』巻十四「天對」に同文あり。○黒黍――くろきびのこと。○稃――穀物の種子を覆う外皮（殻）。○米――穀物の種子。○禾――稲のこと。○黏――粘り気のこと。○李商隱――晩唐の人。字は義山。号は玉溪生。その詩は溫庭筠と名声を斉しくする。また、李商隱の詩体は宋代に至って西崑体と称せられた。○莞・蒲・菰・蘆――莞（ふとい）・蒲（がま）・菰（まこも）・蘆（あし）すべて草の名。

（151）（152）〈何由并投　而鯀疾脩盈〉

疾、悪也。脩、長也。盈、滿也。由、用也。言堯不悪鯀而戮殺之、則禹不得嗣興、民何得投種五穀乎。乃知鯀悪長滿天下也。

〔補曰〕并、並也。言禹平水土、民得並種五穀矣。何由鯀悪長滿天下乎。所謂蓋前人之愆。

〔訓讀文〕

疾は、悪むなり。脩は、長なり。盈は、滿つるなり。由は、用なり。言ふこころは、堯 鯀を悪（にく）むも之を戮殺せざるは、則ち禹 嗣興（しこう）を得ず。民 何ぞ五穀を投種するを得んか。乃ち鯀の悪長く天下に滿つるを知るなり、と。

〔補に曰く〕并は、並なり。言ふこころは禹 水土を平らげ、民 五穀を並種するを得たり。何に由りて鯀の悪長く天下に滿つるか。所謂る蓋し前人の愆（あやま）ちならん、と。

〔語釋〕

○嗣興――前者についでおこる。ここでは禹の後継。

(153)(154)〈白蜺嬰茀　胡爲此堂〉

蜺、雲之有色似龍者也。茀、白雲逶移若蛇者也。言比有蜺茀氣逶移相嬰、何爲此堂乎。蓋屈原所見祠堂也。

〔補曰〕蜺、雌虹也。茀、音拂。説文云、霓、雲貌。疑即此茀字。天對云、王子怪駭、蜺形茀裳。

〔訓讀文〕

蜺は、雲の色有りて龍の似き者なり。茀は、白雲逶移たること蛇の若き者なり。言ふこころは此れ蜺有りて茀氣逶移として相嬰るなり。何ぞ此の堂に爲れるか。蓋し屈原の見る所の祠堂ならんと。

〔補に曰く〕蜺は、雌虹なり。茀は、音は拂。『説文』（雨部）に云ふ、「霓、雲の貌なり」と。疑ふらくは即ち此の茀の字ならん。「天對」に云ふ、「王子怪しみ駭き、蜺茀裳に形はる」と。

〔語釋〕

○説文云――『説文解字』巻十一下雨部に同文あり。○天對云――『柳宗元集』巻十四「天對」に同文あり。○此堂――王逸『楚辭章句』に「蓋し屈原の見る所の祠堂ならん（蓋屈原所見祠堂也。）」とあることから「天問題壁画説」の根拠の一つとされる。藤野岩友博士（『增補 巫系文學論』「設問文學　三「天問」制作の動因に關する二説」）によれば、「天問」制作の動因は、次の二種に分けることが出る。①屈原が、先王の廟や公卿の祠堂に描かれたの圖畫を呵して、その壁に題したものを後人が輯めたとするもの。（題壁画説）この説には、後人之に和するものが多く、宋の洪興祖、朱熹、清の陳本禮、丁晏などがこれである。②清の林西仲の説が代表している。彼は「天問」を以て、屈原の自作自編であり、序次も甚だ明らかで、倒置も重複もなく、一気が貫通していると見ている。清の屈復、戴震などが之に賛成している。（非壁画説）この二説に対し、藤野岩友博士は、両説には各々理はあるが、前者（①）の方が伝統があり、又、事実に根拠をおいているだけに確実な感じを与える。しかし、いづれにせよ、疑問のみを連ねる特殊の文学形式がどこから生じたかについては解答を与えていないという。

（155）（156）〈安得夫良藥　不能固臧〉

臧、善也。言崔文子學仙於王子僑、子僑化爲白蜺而嬰茀、持藥與崔文子、崔文子驚怪、引戈擊蜺中之、因墮其藥、俯而視之、王子僑之尸也。故言得藥不善也。一本夫上有失字。

〔補曰〕崔文子事見列仙傳。

〔訓讀文〕

臧は、善なり。言ふこころは、崔文子 仙を王子僑に學ぶ。子僑 化して白蜺と爲りて嬰茀（えいふつ）たり。藥を持ちて崔文子に與ふ。崔文子驚き怪みて、戈（ほこ）を引き蜺を擊ちて、之に中（あ）つ。因りて其の藥を墮とし、俯して之を視れば、王子僑の尸なり。故に藥を得て善からずと言ふなり、と。一本に夫の上に失の字有り。

〔補に曰く〕崔文子の事は『列仙傳』に見ゆ。

〔語釋〕

○王子僑――周、靈王の太子。名は晋。もと姫姓。直諫して廃せられ、庶人となる。一説に、道士浮丘公と嵩山（すうざん）に登ること三十余年、緱氏山（こうしざん）に登仙し去る。○列仙傳――『列仙傳』巻上に崔文子の記述あり。太山の人。黄老の事を好む。仙術を王子僑に学んだとされる。『列仙傳』に「崔文子は、太山の人なり。文子世よ黄老の事を好む。（崔文子者、太山人也。文子世好黄老事。）」とある。

〔本文〕

(157) 天式從横　天の式は從横にして、
(158) 陽離爰死　陽離るれば爰に死す。
(159) 大鳥何鳴　大鳥何ぞ鳴ける、
(160) 夫焉喪厥體　夫れ焉くに厥(そ)の體を喪へる。
(161) 薸號起雨　薸號(へいがう)雨を起こすに、
(162) 何以興之　何を以て之を興す。
(163) 撰體協脅　體を協脅に撰へて、
(164) 何以膺之　何をて之に膺(あた)る。
(165) 鰲戴山抃　鰲(がう)山を戴きて抃(べん)するに、
(166) 何以安之　何を以てか之を安んずる。
(167) 釋舟陵行　舟を釋(お)きて陵を行かば、
(168) 何以遷之　何を以て之を遷さん。
(169) 惟澆在戸　惟れ澆戸に在りて、
(170) 何求於嫂　何をか嫂(あによめ)に求むる。
(171) 何少康逐犬　何ぞ少康犬に逐はしめて、
(172) 而顛隕厥首　而して厥の首を顛隕(てんゐん)せる。
(173) 女歧縫裳　女歧裳を縫ひ、
(174) 而館同爰止　而も館を同じくして爰に止まる。
(175) 何顛易厥首　何ぞ厥の首を顛易して、
(176) 而親以逢殆　而して親ら以て殆きに逢へる。

(177) 湯謀易旅　湯の旅を易ふることを謀るに、
(178) 何以厚之　何を以て之を厚くする。
(179) 覆舟斟尋　舟を斟尋(しんじん)に覆すに、
(180) 何道取之　何の道にして之を取る。
(181) 桀伐蒙山　桀の蒙山を伐ち、
(182) 何所得焉　何の得る所ぞ。
(183) 妹嬉何肆　妹嬉(まつき)何ぞ肆(ほしいまま)にせる、
(184) 湯何殛焉　湯の何ぞ殛する。

〔通釋〕

天の法則は陰陽が縦横に交わりあっていて、陽が離れるとそのとき人は死ぬ。大きな鳥は何故鳴き、王子僑は何処に失せたのか。滸号の神が雨を降らせるのに、どうやって降らせるのか。一身両頭の鹿の形を具えながら、風の神はどうして雨に応じて風を吹かせるのか。大亀が手を打って舞うのに、どうして背の上の蓬莱山をやすらかに落ち着かせることが出来るのか。たとえば人が舟に乗ることをやめて陸を行くように、大亀が大海から大陸にあがったとしたならば、どうして蓬莱などを移動させることができようか。いったい澆は戸口でどんなことを兄嫁に求めたのか。どうして小康は狩りで犬に獣を逐わせるなどして、それで澆の首をとったのか。兄嫁の女歧は澆の裳裾を縫ってやり、その上宿舎を一緒にして泊まった。なぜ小康は澆と取り違えてその首をとり、女歧みずから危害にあったのか。殷の湯王は敵の夏の民衆を味方にかえて、夏の桀王を伐つ謀をめぐらしたが、どんなにして夏の民衆を厚くもてなしたのか。澆はたちまちに斟尋氏の舟を覆してこれを滅ぼしたが、どんなやり方でその国をとったのであろうか。夏の桀王は蒙山国を征伐して、何が得られたのであろうか。そのとき得た妹嬉はなんと身勝手にしたことだろうか。殷の湯王はどうして彼らを誅したのであろうか。

〔洪興祖補注〕

(157)(158)〈天式從横　陽離爰死〉

式、法也。爰、於也。言天法、有善陰陽從横之道、人失陽氣則死也。

〔補曰〕從、即容切。

〔訓讀文〕

式は、法なり。爰は、於なり。言ふこころは、天の法、陰陽從横の道を善くすること有り。人陽気を失へば則ち死するなり。

〔補に曰く〕從は、即容の切。

〔語釋〕

なし。

(159)(160)〈大鳥何鳴　夫焉喪厥體〉

言崔文子、取王子僑之尸、置之室中、覆之以弊箧。須臾則化爲大鳥而鳴。開而視之、飜飛而去。文子焉能亡子僑之身乎。言仙人不可殺也。喪、一作𠬝。

〔訓讀文〕

言ふこころは、崔文子、王子僑の尸を取りて、之を室中に置き、之を覆ふに弊筐を以てす。須臾にして則ち化して大鳥と爲りて鳴く。開きて之を視れば、飜飛して去る。文子焉んぞ能く子僑の身亡へるか。仙人殺すべからざるを言ふなり。喪、一に𠙵に作る。

〔語釋〕

○王子僑――周の靈王の太子。名は晉。もと姫姓。直諫して廢せられ、庶人となる。○筐――竹製の方形のはこ。

(161)(162)〈萍號起雨　何以興之〉

萍、萍翳、雨師名也。號、呼也。興、起也。言雨師號呼、則雲起而雨下、獨何以興之乎。萍、一作苹、一作萍。

〔補曰〕萍、音瓶。號、乎刀切。山海經、屏翳在海東、時人謂之雨師。天象賦云、太白降神於屏翳。注云、其精降爲雨師之神。博雅、作苹翳。張景陽詩云、豐隆迎號屏。顏師古云、屏翳、一曰萍號。大人賦云、召屏翳、誅風伯、刑雨師。注云、屏翳、天神使也。

〔訓讀文〕

萍は、萍翳、雨師の名なり。號は、呼ぶなり。興は、起こるなり。言ふこころは、雨師號呼すれば、則ち雲起こりて雨下る。獨り何を以て之を興さんや。萍は、一に苹に作り、一に萍に作る。

〔補に曰く〕萍、音は瓶。號は、乎刀の切。『山海經』（「海外東經」）に「屏翳は海の東に在り、時人之を雨師と謂ふ。『天象

賦』に云ふ、「太白 神を屏翳に降す」と。（苗爲）注に云ふ、「其の精降りて雨師の神と爲る。『博雅』は、「荓翳」に作る。張景陽の（雑）詩に云ふ、「豐隆迎へて屏を號ぶ」と。顔師古云ふ、「屏翳、一に荓號と曰ふ」と。（『漢書』「司馬相如傳」の）大人賦に云ふ、「屏翳を召し、風伯を誅し、雨師を刑す」と。（顔師古）注に云ふ、「屏翳は、天神の使なり」と。

〈語釋〉

○山海經――『山海經』巻九「海外東經」に「雨師妾は其の北に在り。（雨師妾在其北。）とあり、郭璞注に「雨師は屏翳を謂ふなり。（雨師謂屏翳也。）」とある。○天象賦――『天文大象賦』のこと。隋の李播の撰。唐の苗爲これに注す。全一巻。既に散佚したようである。○張景陽詩云――『六臣注文選』巻二十九張景陽の「雑詩」に同文あり。○顔師古云――『漢書』巻二十五「郊祀志」の「風伯」「雨師」の杜預注に同文あり。○大人賦云――『漢書』巻五十七「司馬相如傳」に同文あり。○注云――『漢書』巻五十七「司馬相如傳」の顔師古注に同文あり。

（163）（164）〈撰體協脅　何以膺之〉

膺、受也。言天撰十二神。鹿、一身八足兩頭、獨何膺受此形體乎。一云、撰體脅鹿、何以膺之。

〔補曰〕撰、具也。雛綰切。協、合也。脅、虚業切。說文云、兩膀也。膺、於陵切。書曰、永膺多福。膺、當也。受也。天對云、氣怪以神、爰有奇軀、脇屬、支偶、尸帝之隅。

〈訓讀文〉

膺は、受くるなり。言ふこころは、天十二神を撰ふ。鹿、一身八足にして兩頭なり、獨り何ぞ此の形體を膺受せんか。一に云ふ、「撰體脅鹿、何以膺之」と。

〔補に曰く〕撰は、具はるなり。雛綰の切。協は、合ふなり。脅は、虚業の切。『說文』に云ふ、「兩膀なり。膺は、於陵の切」と。『書』（君陳）に曰く、「多福を永膺せん」と。膺は、當たるなり。受くるなり。「天對」に云ふ、「氣 怪にして以て神にして、爰に奇軀有り、脇屬なり、支偶にして、帝の隅を尸る」と。

〈語釋〉

○說文云――『說文解字』にこの語句なし。○書曰――『尚書』巻十八「君陳」に同文あり。○天對云――『柳宗元集』巻十四「天對」に同文あり。

（165）（166）〈鰲戴山抃　何以安之〉

鼇、大龜也。擊手曰抃。列仙傳曰、有巨靈之鼇、背負蓬萊之山而抃舞、戲滄海之中、獨何以安之乎。戴、一作載。抃、釋文作拚。

〔補曰〕鼇、音敖。抃、音卞。列子云、五山之根、無所連箸、帝命禹強使巨鼇十五、舉首而戴之、迭爲三番、六萬歲一交焉。五山始峙而不動。張衡賦云、登蓬萊而容與兮、鼇雖抃而不傾。玄中記云、即巨龜也。一云、海中大鼈。

〈訓讀文〉

鼇は、大龜なり。手を擊つを抃と曰ふ。『列仙傳』に曰く、「巨靈の鼇有り、蓬萊の山を背負ひて抃して舞ひ、滄海の中に戲る、獨り何を以てか之を安んずる。戴は、一に載に作る。抃は、『釋文』に拚に作る。

〔補に曰く〕鼇、音は敖。抃、音は卞。『列子』（「湯問」）に云ふ、「五山の根は、連箸する所無し、帝禹強に命じて巨鼇十五をして、首を舉げて之を戴かしめ、迭ひに三番を爲さしめ、六萬歲にして一たび交はらしむ。五山始めて峙ちて動かず」と。張衡の（思玄）賦に云ふ、「蓬萊に登りて容與す、鼇 抃すと雖も傾かず」と。『玄中記』に云ふ、「即ち巨龜なり」と。一に

云ふ、海中の大鼈なり。

〈語釋〉

○列仙傳曰――ここの記述無し。現在では佚文となったか。○列子云――『列子』巻五「湯問」に「而して五山の根、連著する所無し。（中略）乃ち禺強に命じて巨鼇十五をして、首を擧げて之を戴かしめ、迭ひに三番を爲さしめ、六萬歳にして一たび交はらしむ。五山始めて峙ちて動かず（而五山之根、無所連箸。（中略）乃命禺強使巨鼇十五擧首而戴之。迭爲三番、六萬歳一交焉。五山始峙而不動。）」とある。○張衡賦云――『六臣注文選』巻十五「思玄賦」に同文あり。○玄中記――佚書。

〈167〉〈168〉〈釋舟陵行　何以遷之〉

釋、置也。舟、船也。遷、徙也。舟釋水而陵行、則何能遷徙也。言龜所以能負山若舟船者、以其在水中也。使龜釋水而陵行、則何以能遷徙山乎。

〔補曰〕列子云、龍伯之國有大人、擧足不盈數歩、而曁五山之所、一釣而連六鼇、合負而趣歸其國、灼其骨以數焉。此言鼇在海中。其負山若舟之負物。今釋水而陸、反爲人所負。何罪而見徙也。天對云、悪釋而陵、殆或謫之。龍伯負骨、帝尚窄之。

〈訓讀文〉

釋は、置くなり。舟は、船なり。遷は、徙つるなり。舟水を釋きて陵を行かば、則ち何ぞ能く遷徙せん。言ふこころは、龜能く山を負ふこと舟船の若くする所以の者は、其の水中に在るを以てなり。使龜をして水を釋きて陵行せしむれば、則ち何を以て能く山を遷徙せんや。

〔補に曰く〕『列子』（「湯問」）に云ふ、「龍伯の國に大人有り、足を擧ぐること數歩に盈たずして、五山の所に曁り、一たび

釣して六鼇を連ね、合はせ負ひて趣きて其の國に歸り、其の骨を灼きて以て數ふ」と。此れ鼇の海中に在るを言ふ。其の山を負ふこと舟の物を負ふが若し。今水に釋きて陸せば、反つて人の負ふ所と爲る。何ぞ罪して徙るを見んや。「天對」に云ふ、「惡くんぞ釋てて陵せん、殆んど或は之を謫めん。龍伯骨を負ふ、帝尚ほ之を窄しとす」と。

〈語釋〉

○列子云――『列子』巻五「湯問」では「數歩」を「數千」に作る。○天對云――『柳宗元集』巻十四「天對」では「惡釋而陵」を「要釋而陵」に作る。

(169)(170)〈惟澆在戸　何求於嫂〉

澆、古多力者也。論曰、澆盪舟。言澆無義、淫佚其嫂、往至其戸、佯有所求、因與行淫亂也。

〔補曰〕澆、堯弔切。見騷經。

〈訓讀文〉

澆は、古の多力の者なり。『論』（「憲問第十四」）に曰く、「澆は舟を盪かす」と。言ふこころは、澆は義無く、其の嫂に淫佚し、往きて其の戸に至り、求むる所有りと佯りて、因りて與に淫亂を行ふなり。

〔補に曰く〕澆は、堯弔の切。「騷經」に見ゆ。

〔語釋〕

○論曰――『論語』巻七「憲問第十四」では「澆」を「奡」に作る。○淫佚――男女間のみだらな交わり。

(171)(172)〈何少康逐犬　而顛隕厥首〉

言夏少康因田獵放犬逐獸、遂襲殺澆而斷其頭。

〔補曰〕說文、顛、倒也。俗作顚。下同。隕、從高下也。

〔訓讀文〕

言ふこころは、夏少康は田獵に因りて犬を放ち獸を逐はしむ、遂に澆を襲殺して其の頭を斷つ。

〔補に曰く〕『說文』に、「顛は、倒るるなり。俗に顚に作る。下同じ。隕は、高き從り下つるなり」と。

〔語釋〕

○說文、顛、倒也――『說文解字』にこの語句なし。○隕、從高下也――『說文解字』に同文がある。

(173)(174)〈女歧縫裳　而館同爰止〉

女歧、澆嫂也。館、舍也。爰、於也。言女歧與澆淫佚、爲之縫裳、於是共舍而宿止也。

〔訓讀文〕

女歧は、澆の嫂なり。館は、舍なり。爰は、於なり。言ふこころは、女歧と澆と淫佚にして、之が爲めに裳を縫ふ、是に於て舍を共にして宿止するなり。

〔語釋〕

なし。

（175）（176）〈何顛易厥首　而親以逢殆〉

逢、遇也。殆、危也。言少康夜襲、得女歧頭、以爲澆、因斷之。故言易首、遇危殆也。一本顛下有隕字。殆上有天字。

〔訓讀文〕

逢は、遇ふなり。殆は、危なり。言ふこころは、少康 夜 襲ひ、女歧の頭を得て、以て澆と爲す、因りて之を斷つ。故に首を易ふと言ふ、危殆に遇ふなり。一本に顛の下に隕の字有り。殆の上に天の字有り。

〔語釋〕

なし。

(177)(178)〈湯謀易旅　何以厚之〉

湯、殷王也。旅、衆也。言殷湯欲變易夏衆、使之從己、獨何以厚待之乎。

〔補曰〕書云、攸徂之民、室家相慶、曰、傒予后、后來其蘇。湯之厚其衆、以德而已。

〔訓讀文〕

湯は、殷王なり。旅は、衆なり。言ふこころは、殷湯 夏の衆を變易して、之をして己に從はしめんと欲す、獨り何を以て厚く之を待つや。

〔補に曰く〕『書』（「仲虺之誥」）に云ふ、「徂く攸の民、室家相慶して、曰く、『予が后を傒たん、后來たらば其れ蘇らん』と。湯の其の衆に厚くして、德を以てするのみ。

〔語釋〕

○書云――『尚書』卷七「仲虺之誥」に同文あり。

(179)(180)〈覆舟斟尋　何道取之〉

覆、反也。舟、船也。斟尋、國名也。言少康滅斟尋氏、奄若覆舟。獨以何道取之乎。

〔補曰〕斟、職深切。左傳云、有過澆殺斟灌、以伐斟尋、滅夏后相。注云、二斟、夏同姓諸侯。相失國、依於二斟、爲澆所滅。然則取斟尋者、乃有過澆、非少康也。天對云、康復舊物、尋焉保之。覆舟喩易、尚或艱之。承逸之誤也。取、此苟切。

〔訓讀文〕

覆は、反すなり。舟は、船なり。斟尋は、國名なり。言ふこころは、少康 斟尋氏を滅ぼし、奄たること舟を覆すが若し。獨り何の道を以て之を取れるか。

〔補に曰く〕斟は、職深の切。『左傳』（「襄公四年」）に云ふ、「過の澆斟灌を殺し、以て斟尋を伐ち、夏后相を滅ぼすこと有り」と。（杜預）注に云ふ、「二斟は、夏と同姓の諸侯なり」と。相國を失ひ、二斟に依り、澆の滅ぼす所と爲る。然らば則ち斟尋を取る者、乃ち過の澆有り、少康に非ざるなり。「天對」に云ふ、康 舊物を復す、尋 焉くんぞ之を保つや。舟を覆すは易きに喻ふ、尚ほ或は之れ艱からんや」と。逸の誤を承くるなり。取は、此苟の切。

〔語釋〕

○左傳云――『春秋左氏傳』巻二十九「襄公四年」の傳に「斟灌と斟尋氏とを滅ぼさしめ、澆を過に處く。（滅斟灌及斟尋氏、處澆于過。）」とある。○注云――『春秋左氏傳』巻二十九「襄公四年」の杜預注に「二國は、夏の同姓の諸侯なり。（二國、夏同姓諸侯。）」とある。○天對云――『柳宗元集』巻十四「天對」に同文あり。

（181）（182）〈桀伐蒙山　何所得焉〉

桀、夏亡王也。蒙山、國名也。言夏桀征伐蒙山之國、而得妹嬉也。

〔補曰〕國語云、昔夏桀伐有施、有施人以末嬉女焉。注云、有施、嬉姓之國、末嬉、其女也。

〔訓讀文〕

桀は、夏の亡王なり。蒙山は、國名なり。言ふこころは、夏の桀蒙山の國を征伐して、妹嬉を得るなり。

〔補に曰く〕『國語』（「晉語」）に云ふ、「昔 夏桀 有施を伐つ、有施の人末嬉を以て女はす」と。（賈逵）注に云ふ、「有施は、嬉姓の國なり、末嬉は、其の女なり」と。

〔語釋〕

○國語云――『國語』巻七「晉語」は「末嬉」を「妹喜」に作る。○注云――『國語』巻七「晉語」の賈逵注に同文あり。

(183)(184)〈妹嬉何肆　湯何殛焉〉

言桀得妹嬉、肆其情意、故湯放之南巢也。妹、一作末、殛、一作極。

〔補曰〕妹、音末。嬉、音喜。說文云、殛、殊也。引書殛鯀于羽山。或作極、音義同。

〔訓讀文〕

言ふこころは、桀 妹嬉を得て、其の情意を肆にし、故に湯之を南巢に放つなり。妹、一に末に作る、殛、一に極に作る。

〔補に曰く〕妹、音は末。嬉、音は喜。『說文』（「歹部」）に云ふ、「殛は、殊なり。『書』の鯀を羽山に殛す」を引く。或は極に作る、音義同じ。

〈語釋〉

○肆情意――「情意」はこころ、考えの意。「肆情意」で思い通りにする、身勝手に振る舞うの意か。○說文云――『說文解字』「夕部」に同文あり。